2023_1_16 付

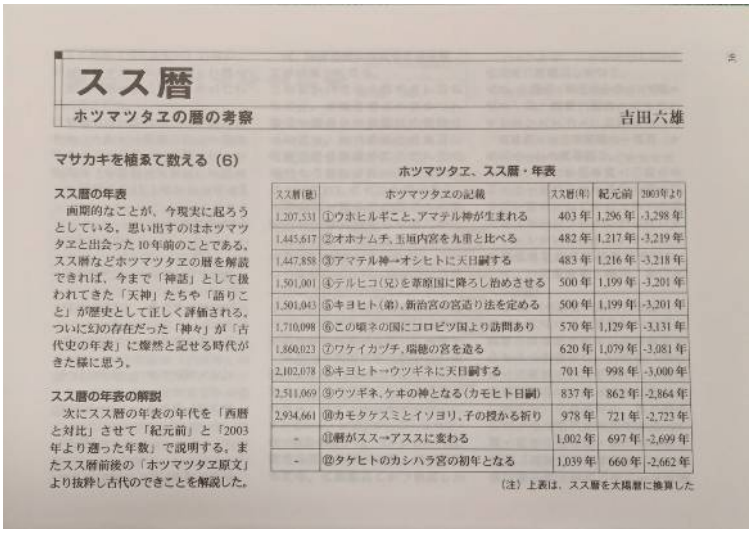
平成 15（2003）年に発表のコピーだった千葉富三氏の鈴紀説

ホツマツタヱ史学研究会　吉田六雄

はじめに

千葉説の根幹であるスス暦の「1 年を 3000 穂」とする説は、彼が「日本の誕生 ： 甦る古代 ： ホツマツタヱ-大和言葉で歌う建国叙事詩（千葉富三編著　文芸社　2009）」で発表する約 6 年前に、赤坂の検証ホツマツタヱ 9 号（2003 年 10 月）で発表されていた。だが、この説には欠点があり、2014 年 2 月 12 日に改訂されていた。

下記の画面は、その時のページのコピーである。



スス暦

ホツマツタヱの暦の考察　　吉田六雄

マサカキを植ゑて数える（6）

スス暦の年表

画期的なことが、今現実に起ろうとしている。思い出すのはホツマツタヱと出会った 10 年前のことである。スス暦などホツマツタヱの暦を解読できれば、今まで「神話」として扱われてきた「天神」たちや「語りこと」が歴史として正しく評価される。ついに幻の存在だった「神々」が「古代史の年表」に燦然と記せる時代がきた様に思う。

スス暦の年表の解説

次にスス暦の年表の年代を「西暦と対比」させて「紀元前」と「2003 年より遡った年数」で説明する。またスス暦前後の「ホツマツタヱ原文」より抜粋し古代のできことを解説した。

ホツマツタヱ、スス暦・年表

スス暦(穂)	ホツマツタヱの記載	スス暦(年)	紀元前	2003年より
1,207,531	①ウホヒルギこと、アマテル神が生まれる	403 年	1,296 年	-3,298 年
1,445,617	②オホナムチ、玉垣内宮を九重と比べる	482 年	1,217 年	-3,219 年
1,447,858	③アマテル神→オシヒトに天日嗣する	483 年	1,216 年	-3,218 年
1,501,001	④テルヒコ（兄）を葦原国に降ろし治めさせる	500 年	1,199 年	-3,201 年
1,501,043	⑤キヨヒト（弟）、新治宮の宮造り法を定める	500 年	1,199 年	-3,201 年
1,710,098	⑥この頃ネの国にコロピツ国より訪問あり	570 年	1,129 年	-3,131 年
1,860,023	⑦ワケイカヅチ、瑞穂の宮を造る	620 年	1,079 年	-3,081 年
2,102,078	⑧キヨヒト→ウツギネに天日嗣する	701 年	998 年	-3,000 年
2,511,069	⑨ウツギネ、ケヰの神となる（カモヒト日嗣）	837 年	862 年	-2,864 年
2,934,661	⑩カモタケスミとイソヨリ、子の授かる祈り	978 年	721 年	-2,723 年
-	⑪暦がスス→アススに変わる	1,002 年	697 年	-2,699 年
-	⑫タケヒトのカシハラ宮の初年となる	1,039 年	660 年	-2,662 年

（注）上表は、スス暦を太陽暦に換算した

その論文の原稿を手に入れたのでご紹介すると、

平成１５（2003）年９月５日作成

ス　ス　暦　　（ホツマツタヱの暦の考察）　（第 9 号）

吉　田　六　雄

マサカキを植ゑて数える（6）

スス暦の年表

画期的なことが、今現実に起ころうとしている。思い出すことはホツマツタヱと出会った 10 年前のことである。スス暦などのホツマツタヱの暦を解読できれば、今まで「神話」として扱われた「天神」たちや「語りこと」が歴史として正しく評価される。ついにその遠い存在だった「神々」が「古代史の年表」として、「古代史」に燦然と現せる時代が到来した様に思う。

スス暦の年表の解説

次にスス暦の年表の年代を「西暦と対比」させて「紀元前」と「２００３年より遡った年数」で説明する。またスス暦前後の「ホツマツタヱ原文」より抜粋し古代のできことを解説した。

ホツマツタヱ、スス暦・年表

スス暦(穂)	ホ ツ マ ツ タ ヱ の 記 載	スス暦(年)	紀元前	2003年より
1,207,531	①ウオヒルギこと、アマテル神が生まれる	403年	1296年	-3298年
1,445,617	②オホナムチ、玉垣内宮を九重と比べる	482年	1217年	-3219年
1,447,858	③アマテル神→オシヒトに天日嗣する	483年	1216年	-3218年
1,501,001	④テルヒコ(兄)を葦原国に降ろし治めさせる	500年	1199年	-3201年
1,501,043	⑤キョヒト(弟)、新治宮の宮造り法を定める	500年	1199年	-3201年
1,710,098	⑥この頃ネの国にコロビツ国より訪問あり	570年	1129年	-3131年
1,860,023	⑦ワケイカヅチ、瑞穂の宮を造る	620年	1079年	-3081年
2,102,078	⑧キョヒト→ウツギネに天日嗣する	701年	998年	-3000年
2,511,069	⑨ウツギネ、ケヰの神となる(カモヒト日嗣)	837年	862年	-2864年
2,934,661	⑩カモタケスミとイソヨリ、子の授かる祈り	978年	721年	-2723年
-	⑪暦がススーアススに変わる	1002年	697年	-2699年
-	⑫タケヒトのカシハラ宮の初年となる	1039年	660年	-2662年
	(注1)上表は、スス暦を太陽暦に換算した。			

この原稿の年代の特徴は、

1、スス暦(穂)の大きい暦数字をスス暦(年)に変換。

2、更に、紀元前年に置き換えていることである。

年代の変換のベースは、神武天皇初年=紀年の紀元前 660 年=スス暦(年)の 1039 年を基準年としていることである。

もう少し、詳しく述べると、

1、スス暦(穂)の大きい暦数字をスス暦(年)式は、

ホツマツタヱの 28 アヤに記載されている「50 鈴の　千枝の二十年」より、1年の穂を 3000 穂と解釈していることである。

(式) 1000 枝 ⇒ 60000 穂 ÷ 20 年 = 3000 穂/年

1 年 3000 穂説の弱点

1、この説は、人間の歳との相関がないことである。

世代間により一人当たりの穂が大きく違うことである。そのため、2014 年 2 月 11 日以前に、1 年 3000 穂説を断念した経緯があった。

詳しく述べると、

古代の天神、臣のオオヤマスミ、オオモノヌシ系の世代は、5～6 代になるが、スス暦(穂)の大きい暦数字を 1 年 3000 穂で割り算すると、スス暦の 27 鈴前後で、計算値が大きく違い、27 鈴以降の人は、2倍の穂になることである。

だが、千葉説は、

(1)「日本の誕生 ： 甦る古代 ： ホツマツタヱ-大和言葉で歌う建国叙事詩(千葉富三編著 文芸社 2009)」の中で、1年3000穂説が発表されて、また、2014年の検証ホツマツタヱ75号で、「人間の歳と年代を数える経過日の違い」に気付きながら無視し「1年3000穂説」を発表され、その後も間違いに気付かれなかった。

表1 秀真伝による天照神関係古代史略年表（抄）

事柄		出典	鈴枝穂		鈴紀	皇紀	西紀
① 高見産霊 日高見に真榊 国統べ・鈴暦始まる		④12		1	元	−1,058	−1,718
② 1,207,520穂 豊受 世継皇子祈り禊ハ千座契る		④24		1,207,520	422	−636	−1,296
③ 大日霊貴(天照神)誕生 若仁と豊受が諱を奉る		④95		1,207,531	433	−625	−1,285
④ 忍穂耳 日高見御座の跡にまた都 多賀の国府		⑪1		1,44,6011	493	−565	−1,225
⑤ 瓊瓊杵の兄 奇玉火明 日高見から斑鳩へ下る		⑳1		1,501,001	541	−517	−1,177
⑥ 筑紫糧たらず 瓊瓊杵 西宮から亀船で鵜戸へ		㉕61		1,860,033	653	−405	−1,065
⑦ 1,732,500穂 天照 丹後真名井神上がり 548歳		㉘142		2,940,001	981	-77	−737
⑧ 神日本磐余彦(神武)誕生 種子 武仁と諱奉る		㉗251		2,904,005	985	−73	−733
⑨ 1,792,470穂 鈴苗尽きるも国潤い村乱れず太平		㉙33		3,000,001	1,001	-57	−717
⑩ 真榊尽き鈴暦(真榊暦)を天鈴暦(梓暦)に改暦		㉘259	天鈴	21	1,021	−37	−697
⑪ 天鈴キミヱ(51) 武仁 饒速日平けに宮崎出発		㉙45		51	1,051	−7	−667
⑫ 天鈴サナト(58) 橿原宮初年神武の御世始まる		㉙265		58	1,058	元	−660
平成27年	⑬ 天鈴・鈴紀・皇紀・西紀の各現在年			2,733	3,733	2,675	2,015
	③ 天照神諱若仁誕生日「天照紀」元年	検算	⑬−③=⑭		433	−625	−1,285
	⑭ 天照生誕「天照紀」3，300年				3,300	3,300	3,300

注 鈴枝穂＝鈴穂(鈴−1)×60,000＋枝穂(枝×60)＋穂　鈴紀＝(鈴枝穂−穂)÷3,000＋穂＝天鈴＋1，000

2022_1_3 付
2022_11_16 追加

真正なホツマ暦と乖離した千葉富三氏の鈴紀説を糺す

ホツマツタヱ史学研究会

はじめに

ホツマの暦の解読結果は、正しいか否かに関わらず、本にして世間に出ると、ホツマツタヱを知らなくても、その本が「正しい」と思われる。

その例として、東北のホツマ研究会の「千葉 富三」氏は、多くのホツマ関連の本を世に出されている。その本をご覧になられた飯沼勇義氏は、「解き明かされる日本最古の歴史津波(飯沼勇義著 鳥影社 2013)」の中で、「ホルマツタエの記述から、東北地方の太平洋沿岸が定期的に巨大津波に襲われることを解明」なされた。」との世間の評価である。だが、スス暦の暦法が無視された年代が引用されたことが判明した。

末尾に、「解き明かされる日本最古の歴史津波」の紙面抜粋と千葉富三氏の乖離した説の誤訳の計算を再現し掲示したので、ご覧下さい。また、吉田説の「ホツマ暦の解読について」、YouTube で公開しておりますので、ご覧下さい。

千葉氏の蔵書一覧 (国会図書館資料を引用)

(1)日本の誕生 : 甦る古代 :
ホツマツタヱ-大和言葉で歌う建国叙事詩(千葉富三編著 文芸社 2009)

(2)甦る古代日本の真実 :
全訳秀真伝記紀対照-1300 年の封印を解く(千葉富三編著 文芸社 2012)

(3)現代辞書で読み解く
真実の日本建国史秀真伝 人の世の巻(千葉富三編著 ともはつよし社 2016)

(4)現代辞書で読み解く
真実の日本建国史秀真伝 神の世の巻(千葉富三編著 ともはつよし社 2016)

(5)甦る古代日本の原典秀真伝 :
解明-古事記・日本書紀の底本だった!(千葉富三編著 明窓出版 2018)

(6)あらましの秀真伝 :
古代文字のヤマトコトバを現代文字で読み明かす!(千葉富三編著 明窓出版 2020)

千葉富三氏が公開されたホツマ暦

皇御祖天照神の生誕三千三百年

『日本書紀』の紀年「百七十九万二千四百七十六歳」も
『秀真伝』の暦「日と由日と実と合日と由日」で解く

千葉富三

よる「秀真暦」を解き明かすことで皇御祖天照神の生誕三千三百年の世界史上にも比類なき稀有の佳節を平成二十七年＝西紀二〇一五年に迎えることを、同学諸賢のもと検証の俎上に載せ、あわせて、日本書紀の謎の数値「…余歳」を解明し、また、

というものであった。これは経過期間の「年」を数える単位として「鈴」と「枝」と「穂」があり、それが兄弟ェトの六十通りの単位と連動して、いわば六十進法によるというのが鈴暦です。本稿はここで暦法そのものを究明をしようとするものではなく、これによる年表の作成とその応用が目的ですので、暦法についてはあまり深入りしないこととします。

御氏は、検証ホツマツタヱ（第 75 号、平成 26 年 10 月）の 2～21 頁に、ホツマツタヱのスス暦、アスス暦の解読方法、結果を『皇御祖天照神の生誕三千三百年』の題名で投稿されていた。

コメント

学術的になんら根拠がないスス暦の誤読説が、後述で判明する。なお、千葉氏の原稿内容は、『　』内に記載した。

3 頁抜粋

そして、『「秀真暦」を解き明かすことで、皇御祖天照神の生誕三千三百年の世界史にも比類なき稀有の佳節を平成二十七年=西暦二〇一五年に迎えることを、同学諸賢のもと検証の俎上に載せ、・・』と気構えを書いていた。

6 頁抜粋

また、『六十進法によるというのが鈴暦です。』と述べ、次の文章では、『本稿はここで暦法そのものを究明しようとするものでなく、これによる年表の作成とその応用が目的ですので、暦法についてはあまり深入りしないこことします。』としている。

コメント

年表と暦法は一体であり、スス暦の暦法を解明しないままの年表の発表は、学術的、ホツマを軽視、無視した「馬鹿げた」行為である。後述の「年齢と時の経過」を一致させて無くで矛盾がでる。

天鈴暦は、それまでの鈴暦の最後の「五十鈴」が「千枝」になっても鈴苗が見つからないまま「二十一穂」になり、その「五十鈴千枝二十一穂」つまり「五十一鈴二十一穂」を「天鈴二十一穂」とし、ここでは、これにヱト二十一番目の「年キナヱ」を

6 頁抜粋

『天鈴は、それまでの最後の「五十鈴」が「千枝」になっても鈴苗が見つからないまま「二十一穂」になり、その「五十鈴千枝二十一穂」つまり「五十一鈴二十一穂」を「天鈴二十一穂」とし、ここでは、これにヱト二十一番目の「年キナヱ」を』と記入していた。

ホツマの記述 （2022_11_16 追加）

「天鈴に極め　二十一穂の　キナヱの春は、天二重　天鈴と　名お変えて」

コメント(1) （2022_11_16 追加）

千葉説の間違いは、「キナヱ(21 穂)の春は、天二重」を拡大解釈され、鈴暦と天鈴暦の暦法の違いを、なぜか、同じと扱われていた。現実の暦法も違っており、人の寿命に大きな歳の表示の違いがあった。

アマテル神は、1732500 年(千葉説では 577 歳)も永らえた。タケヒト(神武天皇)は 127 歳で崩御されたとの大きな違いがある。

ここで、改悪の思考過程を再現すると、天鈴暦で①枝を無くすと考えたようだ。

五十鈴千枝二十一穂

↓

枝を無くす⇒千枝⇒1 鈴と解釈⇒51 鈴

↓

五十一鈴二十一穂(ホツマに無い記述)

↓

五十一鈴⇒勝手に、天鈴暦と読替え

↓

天鈴二十一穂

コメント(2)

　暦を解読するためには、暦法の解読が先であり、暦の基本であり、「一日の単位」がスス暦とアスス暦では違う。

一日の穂(暦法)

　スス暦は、1～26 鈴 999 枝 60 穂までが、一日を 16 穂で刻んでいる。27 鈴～50 鈴 1000 枝 20 年までは、二日を 16 穂で刻んでいる暦法の暦である。

一日の時間(暦法)

　アスス暦は、日本書紀と同じく、シナ(支那)の儀鳳暦らの暦法で解読できる暦であり、更に、近代的な太陰非太陽暦であるとする一日の暦法を有する暦である。(16 代天皇の年齢が平均約 120 歳と異質の暦だった。)

7 頁抜粋

次に②穂だけで年数を数えたと誤解釈され、『天鈴は、穂だけで年数を数え、これに経過五十鈴分 1,000 年を加えた数値が鈴紀で現在でも通算できます。』と誤解釈されている。

コメント　(2022_11_16 追加)

　千葉氏の誤解説を解説すると、「五十鈴分 1,000 年」説は、ホツマに存在しない。そこで誤解説の元を解説すると、次の二つの式で誤訳を正しいとしていた。

式　　50 鈴×6 万穂÷千年=3000 穂/年

式 1000 枝×60 穂÷20 年=3000 穂/年

　そして、二つの式の値が一致するため、1000 枝 20 年説が信じられた。

併記したものです。これで枝はなくなり、天鈴は穂だけで年数を数え、これに経過五十鈴分 1,000 年を加えた数値が鈴紀で現代でも通算できます。

だが、ホツマには「キナヱ(21 穂)の春は、天二重」と記述され、暦法上において、50 鈴 1000 枝 20 年の翌年には、50 鈴 1000 枝 21 年と天鈴 21 年の二つの年が存在していた。

すると、先の 1000 枝 20 年説は、鈴暦の 1 鈴=1000 枝は 20 年であったする説以外に、1000 枝 21 年説もあったことになる。

だが、このような二つの説は架空の説であり、また、ホツマにも 1000 枝 20 年説は存在しない。

本来の 1000 枝 20 年の意味

50 鈴で鈴苗がなくなることを、最後の枝に倣い 1000 枝とした。だが、経過年は 20 年であったため、ホツマに 1000 枝 20 年と記述したのが正論である。これが、1000 枝 20 年説の誤訳を糺す解説である。

天の巡りの三百六十五枝より糺す

ホツマの記述には、「天の巡りの(1 年)三百六十五枝　四つ三つ分けて　三十一なり　月は遅れて三十足らず　まこと三十一ぞ」の文があり、これを当てはめて、「年数」を計算しても、『経過五十鈴分 1,000 年する』説は、次の計算の様に 1,000 年でなく、136 年となり成り立たない。

50 鈴を枝換算

式 1　50 鈴=50×1000 枝=50,000 枝

枝を年に換算

式 2　50,000 枝÷365 枝/年=136 年

問題は鈴暦の読み方で「書紀・秀真」共通の謎「大きい」数値の読み解きが先決となります。

鈴枝穂　表１の脚注「鈴枝穂」で「鈴穂」の「鈴」から１を引いてから60,000を乗じた(㉑21)―この「引く1」は、「21世紀の15年」といった場合に、21から1を引いてから100を乗じ、15を足して2015とするのと同じようなものです。「枝穂」は枝に60を乗じた(㉑20)もの、「鈴枝穂」は鈴穂と枝穂と穂を足したもので、謎の大きな数値は「年齢」ではなく「時の経過」の、この鈴枝穂でした。

7頁抜粋

『「大きい」数値の読み解きが先決となります。』、『謎の大きい数値は「年齢」でなく「時の経過」の、この鈴枝穂でした。』と記述しているが、スス暦の一日の単位を解読してないため、「年齢」と「時の経過」を別物と誤解釈している。

コロント

　スス暦の暦法を、先に、解読しておれば、近代の太陽暦と同じ様に、「暦では、年齢も時の経過も同じ年月日、ヱトの単位で表される。」ことがわかる。浅はか。

問題は鈴暦の読み方で「書紀・秀真」共通の謎「大きい」数値の読み解きが先決となります。

これについては、拙著『甦る古代日本の誕生』(文芸社)「付録3」の「年表」を作るにあたって、「凡例に代えて」で述べ、後著『甦る古代日本の真実』(同)でも付録として「略年表」を掲げたところでした。

7頁抜粋

『「大きい」数値の読み解きが先決となります。』、『これについては、拙著「甦る古代日本の誕生」(文芸社)「付録3」の「年表」を作るにあたって、「凡例に代えて」で述べ、後著「甦る古代日本の真実」(同)でも付録として「略年表」を掲げたところでした。』

本稿では末尾に**別表1**から**3**まで「略年表」「検証」「ヱト・エト対照表」を掲げましたが、ここでは天照神関係を抄録した上の表1でまずみることにします。

　また、『本稿では末尾に別表1から3まで「略年表」を掲げましたが、ここでは天照神関係を抄録した上の表1でまずみることにします。』と記述されている。

コメント

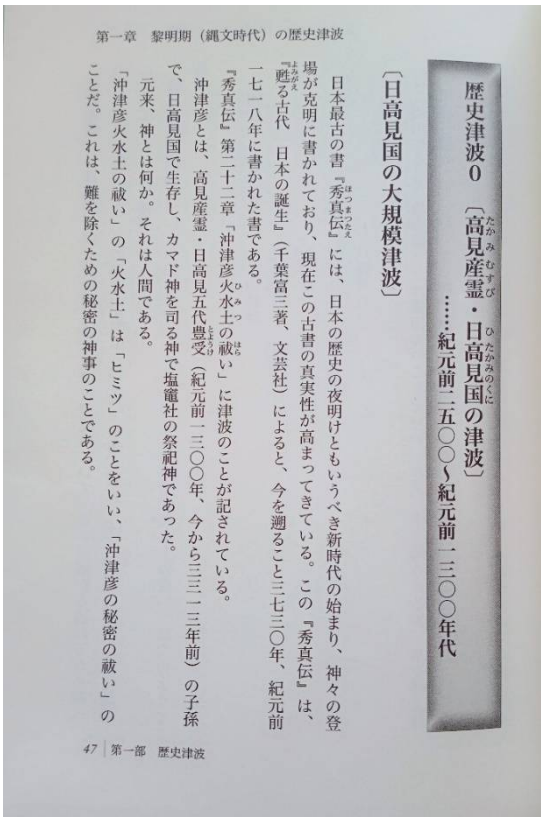
　スス暦、アスス暦の一日、月の日数、一年の日数を解読しないまま、ホツマの記述の暦法に基づかない「カンジニアリング」で年表を作成。たまたま、アマテル神の生誕が、三千三百年と古代らしい年代と計算されたため、国会図書館

に寄贈された「甦る古代日本の誕生」に掲載されたと思えるが真実は不明。

また、何時しか、他の研究者が絶賛するため、スス暦、アスス暦の暦法の解読が成されないまま、「検証ホツマツタヱ」に投稿されたようだ。

残念なことは、スス暦の年代の計算が理系的に解析されてない。暦法的に検討されてないことを本人も認めながら、原稿を投稿したことは罪深いようだ。なお、「付録 3」、「別表 1 から 3」での指摘内容は、前述と重複するため、省略する。

解き明かされる日本最古の歴史津波
（飯沼勇義著 鳥影社 2013）
47 頁



第一章　黎明期（縄文時代）の歴史津波

歴史津波０　〔高見産霊・日高見国の津波〕
……紀元前二五〇〇～紀元前一三〇〇年代

〔日高見国の大規模津波〕

日本最古の書『秀真伝』には、日本の歴史の夜明けともいうべき新時代の始まり、神々の登場が克明に書かれており、現在この古書の真実性が高まってきている。この『秀真伝』は、『甦る古代　日本の誕生』（千葉富三著、文芸社）によると、今を遡ること三七三〇年、紀元前一七一八年に書かれた書である。

『秀真伝』第二十二章「沖津彦火水土の祓い」に津波のことが記されている。

沖津彦とは、高見産霊・日高見五代豊受（紀元前一三〇〇年、今から三三一三年前）の子孫で、日高見国で生存し、カマド神を司る神で塩竈社の祭祀神であった。

元来、神とは何か。それは人間である。

「沖津彦火水土の祓い」の「火水土」は「ヒミツ」のことをいい、「沖津彦の秘密の祓い」のことだ。これは、難を除くための秘密の神事のことである。

47 | 第一部　歴史津波

概略（世間の誤った評価）

ホルマツタエの記述から、東北地方の太平洋沿岸が定期的に巨大津波に襲われることを解明」された。

左記の本の抜粋

『日本最古の書・・「秀真伝」は、・・・今を遡ること三七三〇年、紀元前一七一八年に書かれた書である。』

千葉説の再現

紀元前一七一八年の算出の根拠を検証して見ると、スス暦の元年（1 鈴 1 穂）を「0 穂=元」としている。（正解「1 穂」）

また、スス暦の末の 50 鈴 20 穂を「2940020 穂」＝1000 年、50 鈴 1000 枝 20 穂「3000020 穂」=1020 年。

更に、神武天皇元年のアスス 58 年を 1080 年と見なしていた。

そして、古代への遡り年の起点は、神武天皇元年（紀元前 660 年）を選定。

計算式

スス暦の元年とされた

鈴紀元前一七一八年を再現すると、式1

鈴紀神武元年　鈴暦元年　経過年数

(1)　1058 年　－ 0 年　＝ 1058 年

式 2

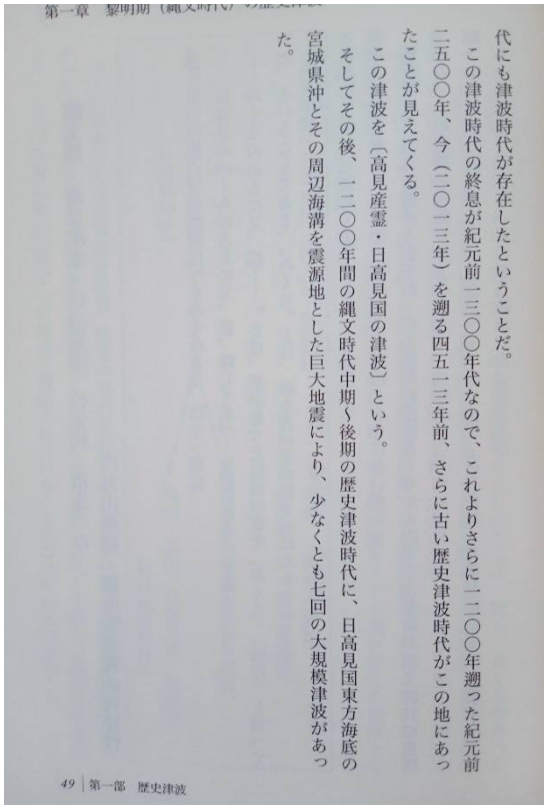
西暦神武元年　鈴経過年　鈴紀元年

(2)　-660 年　－ 1058 年　＝ -1718 年

コメント

-1718 年、1058 年は、スス暦に根拠を持たない、馬鹿げた年代説である。

48 頁



第一章　黎明期（縄文時代）の歴史津波

代にも津波時代が存在したということだ。

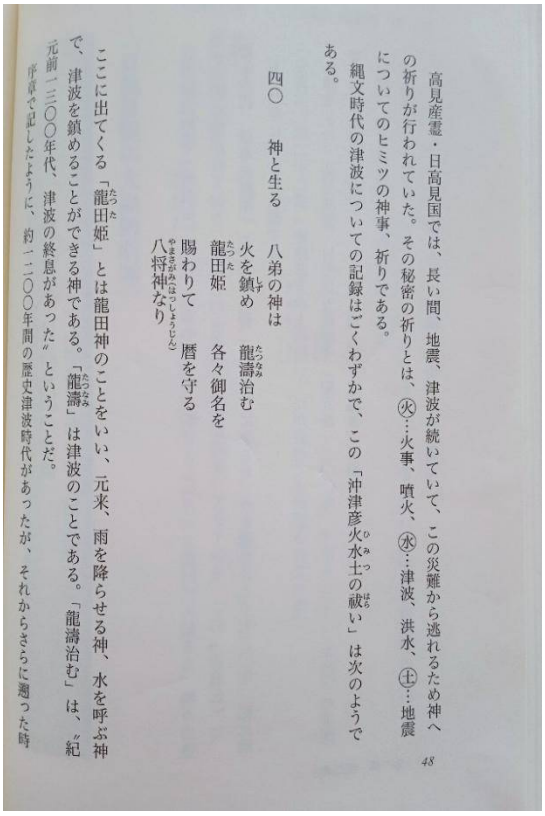
この津波時代の終息が紀元前一三〇〇年代なので、これよりさらに一二〇〇年遡った紀元前二五〇〇年、今（二〇一三年）を遡る四五一三年前、さらに古い歴史津波時代がこの地にあったことが見えてくる。

この津波を〔高見産霊・日高見国の津波〕という。

そしてその後、一二〇〇年間の縄文時代中期～後期の歴史津波時代に、日高見国東方海底の宮城県沖とその周辺海溝を震源地とした巨大地震により、少なくとも七回の大規模津波があった。

49 | 第一部　歴史津波

49 頁



高見産霊・日高見国では、長い間、地震、津波が続いていて、この災難から逃れるため神への祈りが行われていた。その秘密の祈りとは、㊋…火事、噴火、㊌…津波、洪水、㊏…地震についてのヒミツの神事、祈りである。

縄文時代の津波についての記録はごくわずかで、この「沖津彦火水土の祓い」は次のようである。

四〇　神と生る　八弟の神は
火を鎮め　龍濤治む
龍田姫　各々御名を
賜わりて　暦を守る
八将神なり

ここに出てくる「龍田姫」とは龍田神のことをいい、元来、雨を降らせる神、水を呼ぶ神で、津波を鎮めることができる神である。「龍濤」は津波のことである。「龍濤治む」は、〝紀元前一三〇〇年代、津波の終息があった〟ということだ。

序章で記したように、約一二〇〇年間の歴史津波時代があったが、それからさらに遡った時

48

（終わり）